論文概要

現代中国都市部における回族によるイスラーム運動に関する人類学的研究
―雲南省昆明市の事例を中心として―

奈良雅史

本論文は、現代中国雲南省昆明市の都市部における回族によるダアワ（宣教）運動やイスラーム教育活動などのイスラーム運動を対象とし、その運動の展開、さらにその運動に関わる人びとのイスラーム実践を記述、分析する。そのことを通して、回族によるイスラーム運動が矛盾をはらみつつ展開されていく過程、およびそこから立ち現れる回族にとってのイスラームのあり方を明らかにしたものである。

中国では 1978 年に「改革・開放」政策が導入されて以降、宗教政策の緩和により、宗教が急激に復興してきた。それは回族社会においても例外ではなく、メッカ巡礼などイスラームに関わる活動が活発化し、そうした中で聖典主義的な宗教言説が影響力を増している。一方で、1980 年代以降、都市部では再開発に伴う伝統的な回族コミュニティの解体に伴う回族と漢族の雑居化の進展や回族と漢族の通婚の増加など漢化の現象も同時にみられる。また、政府の宗教に対する管理統制は、特に都市部では厳しく行われ、宗教活動は政府のコントロール下に置かれている。本論では、こうした矛盾をはらむ宗教的、社会的、政治的な状況において、回族のイスラーム運動が、教義としてのイスラームや国家が法的に定める宗教に規定されながらも、それらには還元されないアンビバレントなものとして実践される様相を明らかにした。

本論は全 6 章から構成される。第 1 章では、先行研究を検討し、問題の所在を明らかにした。続く第 2 章では、回族の歴史的背景を概観した。第 3 章から第 5 章にかけて、回族のイスラーム運動の民族誌的事例を記述した。第 6 章では、以上を総括し、考察を行った。

第 1 章「序論」では、まず人類学における儀礼研究と宗教研究を検討した。儀礼研究では、宗教と世俗の区分を前提とせず、人びとの実践を記述、分析してきた。一方、宗教研究では、宗教と世俗の区分を前提とし、それらの関係に焦点を当てる傾向にあった。しかし、この区分は世俗主義を原則とする近代国家を前提としたものであり、国家の制度に還元しえない回族の実践を十全に理解することを妨げる。よって、本論では儀礼研究のように宗教と世俗を区分せずに人びとの実践を記述、分析する方法をとった。さらに、イスラーム復興および中国の宗教復興の先行研究を検討し、その意義を示した。前者では、イスラーム運動を教義としてのイスラームやそれに基づく敬虔さに還元してしまい、イスラーム運動がいかに特定の地域的文脈における様々なつながりのなかで展開されてきたのかが等閑視される傾向にあった。また、後者では、国家の制度と宗教復興の関係に焦点が当てられ、制度化しない微細な宗教実践が等閑視される傾向にあった。以上を踏まえ、本論では、宗教と世俗の区分を前提としないことで、回族の運動を教義としてのイスラームにも、制度的な宗教にも還元せず、地域の文脈に即して当事者たちにとっての運動のあり方や意

味を捉えることを課題とした。

第 2 章「回族の歴史的背景」では、回族の歴史的な形成過程を概観した。はじめに唐代から元代にかけて中国に移住した外国人ムスリムが中国のムスリムへとそのあり方を変えていく過程、および清末の回民蜂起に至る過程で、通婚関係の縮小に顕著にみられるように、漢人とムスリムのあいだの境界が実体化する経緯を描いた。次いで、必ずしも民族とみなされていなかったムスリムが「回族」と認定される過程を 1930 年代の政治状況と中国共産党の民族政策との関連から概観した。最後に、現在の昆明市の回族社会の状況として、敬虔化する回族と漢化する回族という二極化の傾向、「敬虔なムスリム」と「漢化した回族」という新たな境界が問題とされる現状を示した。こうした状況下、それまで不可分とされる傾向が強かった「回族」と「ムスリム」が、異なるカテゴリーと認識されるようになりつつある。

第 3 章「イスラーム復興と漢化のあいだ」では、2 つの運動を事例として、その対照的な展開過程を描いた。ひとつは大学生を中心に行われるダアワ運動である。ここで注目すべき点は、運動を担う大学生の多くが必ずしも敬虔なムスリムではないということである。昆明市では、近代教育に基づく漢語能力や教養がイスラームを理解するうえで不可欠なものとみなされ、世俗的エリートである大学生が宗教的権威を発揮しうる状況にある。こうした状況が、必ずしも敬虔ではない大学生がダアワ運動の主要な担い手として、イスラームを宣教する状況を生む一因となっている。

それに加えて、ダアワ運動自体が多様なアクターの利害を巻き込みながら展開されてきたことがその要因として挙げられる。ダアワ運動は敬虔な回族大学生を中心に宗教指導者の支持を受けながら宣教を主要な目的として始められたが、様々な目的を持った人びとの部分的な利害の共有によりその規模を拡大させていった。例えば、普通教育の普及による民族の振興を目指し、運動を経済的に支援する回族の一般信徒、ムスリムの異性との出会いの場を求める回族大学生などが挙げられる。その結果、ダアワ運動は、民族運動でもあり、レクリエーション活動でもあるようなものとして、運動のあり方をめぐる矛盾をはらみ、時にそれを顕在化させながら展開されている。

もうひとつの事例は、回族のインターネット・コミュニティを媒介とした公益活動である。上述のように回族の伝統的コミュニティが解体し、回族同士が日常的に顔を合わせる機会が減少するなか、回族が集まりの場を提供し、回族の団結を高めることを目的として、2005 年に昆明市の回族によりインターネット・コミュニティがつくられ、それを媒介に回族のレクリエーション活動が行われるようになった。この活動は教義としてのイスラームと直接的に関係しないものであり、またこのコミュニティの主要なメンバーには日常的に礼拝などのイスラーム実践を行わない者が多かった。そのため、敬虔な回族はこのインターネット・コミュニティおよびその活動を否定的に評価し、当初、活動への参加を忌避する傾向にあった。しかし、上述の都市開発などに伴う社会変化により、結婚や就職が回族社会で広く問題とされる状況下、このレクリエーション活動は異性との出会いや就職活動の場も兼ね、敬虔さの度合いを問わず回族が集まる場となった。その結果、回族のインタ

ーネット・コミュニティが媒介となり、敬虔さの度合いの異なる回族を横断するネットワークがつくられていった。

その過程で、当初レクリエーション活動を中心に行われていた回族インターネット・コミュニティの活動自体も変化していった。敬虔な回族がメンバーとして加わることで、それまでの活動が教義としてのイスラームと関連づけられていく。独身者たちのあいだの友好を深めるための活動として、そこには教義としてのイスラームとの関係が明確には表れていなかった。しかし、リュウ・ジエをはじめとする敬虔なムスリムが QQ 群に加わることで、そうした活動はイスラームを宣教するための活動ともなっていく。それまで単なる回族の相互扶助や異性の出会いの場として行われてきた公益活動が、イスラームの宣教を兼ねた活動として展開されるようになる。例えば、お見合いパーティーにおいて、その参加者にイスラームの教義についての説教もそのイベントの一環として行われるようになった。つまり、回族のインターネット・コミュニティが媒介する新たな回族のあいだの連鎖によって、レクリエーション活動であると同時に、宣教活動でもあるような公益活動として展開されるようになった。

以上の事例から、本章では回族のイスラーム運動が、教義としてのイスラームが前景化しないアンビバレントな特徴を持ったものとして展開されることを明らかにした。

第 4 章「「宗教」に抗するイスラーム」では、2 つのインフォーマルな宗教活動を事例とし、その活動と政府の宗教管理制度との関係を論じた。ひとつは、地域を移動し、モスクに住み込んで行われるイスラーム学習活動である。昆明市は雲南省の首府であり、当局の宗教への管理統制が比較的厳しく行われている。そのため、ムスリムがモスクに住み込んでイスラームを学ぶ活動は政府に制限される。しかし、政治経済的状況あるいは歴史的背景の異なる地域では、政府の宗教への統制の度合いは大きく異なる。本章ではそうした地域として、雲南省紅河ハニ族イ族自治州に位置する沙甸区を取り上げた。当地は回族が集住する地域であり、中国におけるイスラームの中心のひとつでもある。加えて、当地では文革期に回族に対する虐殺事件が起こったため、中国共産党政府のイスラームに対する管理統制がそれほど厳しく行われていない。昆明市のように政府の宗教に対する統制が厳しい地域では、ムスリムがモスクに住み込んでイスラームを学ぶ「ジャマーアト訪問」は行えない状況にあるが、政府による宗教への統制が緩やかな沙甸区ではそれが活発化している。つまり、人びとは、そうした地域間の移動により、当局からの取締りの危険性を抑えつつ、昆明市では実施が困難な活動を行う。中国共産党政府は、宗教活動を政府公認のモスクなど特定の「宗教活動場所」に限定し、それらの間の連携を制限し、中国共産党をトップとした縦割りの秩序体系に位置づけることで宗教をその管理統制下に置く。しかし、人びとはそうした政府の統治の論理が前提としない地域を越えた移動を伴う実践によって、政府の宗教管理制度を部分的に形骸化しうる。

但し、多くの回族にとって日常的に地域を越えて移動することは難しい。それでは、昆明市のように政府による宗教への統制が厳しい地域で人びとはいかにそれに対処しうるのか。こうした問題に焦点を当てるため、もうひとつの事例として、昆明市内での聖職者資

格を持たない回族によるイスラーム教育活動を取り上げた。昆明市ではモスクや聖職者は政府の統制下にあるため、一般信徒からは政府寄りとみなされ、その権威が衰退しつつある。そのため、既存のモスクや政府が認定する聖職者によらないイスラーム教育活動が行われている。但し、政府の宗教に対する統制が厳しい昆明市では、こうしたインフォーマルな宗教活動は、政府から取締りを受ける危険性を常にはらんでいる。彼らは当局からの取締りを受ける度に、抵抗するのではなく、活動を一時的に中断し、活動場所を変え、あるいは活動のあり方自体を変えていく。例えば、あるイスラーム教育活動では、はじめは参加者の経営する会社の研修室で活動を行い、それが政府からの取締りの危険に晒されると、その活動を休止した。さらに参加者の友人である公認モスクの聖職者をたより、その聖職者の名義で公認モスクにおいて活動を再開した。さらに取締りを受けると、再び活動を休止し、今度は活動の名目からイスラーム教育を外し、「世俗的な」活動として会社の研修室での再開が試みられた。彼らはこのように不断に動き続けることで、政府によって完全に活動が取り締まられてしまうことなく、断続的ながら活動を継続していく。

本章では、以上のようにイスラーム運動が国家の制度上の宗教として実体化することを回避しながら展開されることで、回族の人びとが制度に完全には取り込まれず、ある程度自律的な活動を行うことを可能にしている状況を明らかにした。

続く第 5 章「ムスリムと回族」では、本論で取り上げてきたイスラーム運動に関与する人びとを取りまく重層的な社会的関係に焦点を当て、敬虔さを基準とした「ムスリム／回族」という二分法では捉えられないムスリムとしてのあり方を明らかにした。加えて、敬虔さが「ムスリムであること」の条件として強調されるなかで変化する回族と漢族との関係について論じた。

現地において「敬虔なムスリム」とみなされる回族は、イスラームを客体化し、教義としてのイスラームを厳格に実践することでムスリムであろうとする傾向にある。しかし、彼らは漢族を中心とする学校や職場などの社会的文脈では、必ずしも厳格にイスラームを実践することができない。そのため、彼らはムスリムとしての生きにくさや挫折を経験し、なかにはイスラーム国家への移住を企図する者もいる。一方、日常的にイスラームを実践しない回族は、「敬虔なムスリム」から敬虔ではない「漢化した回族」と否定的に評価されるが、故郷や自宅などの社会的文脈では厳格にイスラームを実践する者もおり、部分的には「敬虔なムスリム」でもある。また、彼らにとって「漢化」したとされる状況は、進学や就職のための一時的な状況と位置付けられる。その意味で、彼らは「敬虔なムスリム」とは異なり、教義としてのイスラームを実践するというよりも、必ずしもイスラーム的ではない社会的つながりのなかで、折り合いをつけながらイスラームを実践するといえる。

以上のイスラーム運動という文脈だけに還元されない回族の生活世界におけるイスラーム実践から明らかになるのは、彼らが実践するイスラーム運動だけではなく、彼らのムスリムとしてのあり方自体が、現地のイスラーム言説における「ムスリム」と「回族」を異なるカテゴリーとして分化する「敬虔／不敬虔」という二分法に還元しえないアンビバレントなものであるということである。

このように敬虔さを強調するイスラーム言説における「ムスリム」と「回族」の二分法は実践レベルでは必ずしも顕在化しない。しかし、その一方で、こうした敬虔さの強調は回族と漢族との関係に変化をもたらしつつある。敬虔さを重視するイスラーム言説は、上述のように回族に生きにくさを経験させるが、一方で回族に別の可能性を開いている面もある。第 2 章で論じたように清末における回民と漢族の対立のなかで、それらのあいだの境界が実体化し、回民あるいは回族の間に族内婚への強い選好が形成されてきた。しかし、敬虔さの重視は、それまで一体とみなされる傾向にあった回族とムスリムを異なるカテゴリーだと認識することにつながり、原則的に漢族を潜在的なムスリムとみなすことを可能にした。その結果、回族が漢族のイスラーム運動への参加や回族と漢族との通婚を許容しうる余地が拡大しつつある。

そして第 6 章「結論」では以上の議論を総括し、イスラーム的、制度的に二重にアンビバレントな回族のイスラーム運動の特徴を論じた。回族の運動は宗教と世俗の区別なく、多様な要素を巻き込み展開され、制度上の宗教と世俗をつなぐ新たなネットワークを形成する。そのため、この運動は政府が管理統制の対象とする宗教の領域の外部へと拡がり、制度上の宗教に回収されない余地が生まれる。

また、これらのイスラーム運動の特徴を回族のムスリムとしてのあり方との関連から考察した。言説レベルでは回族は、その敬虔さによって「敬虔なムスリム」と「漢化した回族」とに二分法的に分類される傾向にあるが、第 5 章で論じたように回族のムスリムとしてのあり方は、その敬虔さの度合いに関わらず、部分的に敬虔であり、部分的に非敬虔でもあるもの、あるいはそうあらざるをえないものである。上述の回族のイスラーム運動の二重にアンビバレントな特徴は、単に敬虔さの度合いが異なるアクターの部分的な利害の共有により成り立っているわけではなく、こうしたアンビバレントな回族のあり方に関係するものだと考えられる。つまり、回族のイスラーム運動は、異なる利害を持った異なるアクターのつながりというよりは、その強調点は異なるが、矛盾をはらんだ異なる諸利害を持つという意味で共通するアクターのつながりによって展開されているといえる。以上を踏まえると、回族のイスラーム運動は、宗教上、政治上のイスラームの復興や拡大というよりも、それが教育や婚姻をその重要な要素としていたことに示されるように、ムスリムとしての生きにくさを伴う中国社会において、それらを通じて宗教的、民族的マイノリティとしての回族という集団を再生産していくことに関わるものであるといえる。

最後に、この運動を歴史的に位置づけて考察した。外来ムスリムをその主な出自とする回族は、歴史的にその時代の政治的、社会的状況によって、そのあり方を変えてきた。そうした歴史的過程のなかで、本論が取り上げた回族のイスラーム運動と類似した現象も幾度かみられる。そうした現象として、明代から清末にかけて実施されたイスラーム教育改革、および清末から民国期にかけて回民の近代的知識人と改革派アホンを中心に展開された、イスラーム復興運動とも呼ばれる「中国イスラーム新文化運動」が挙げられる。これらは、本論で取り上げたイスラーム運動と同様に、アラビア語教育あるいはイスラーム教育と漢語教育あるいは世俗的、近代的教育との両立を目指すことをその主な特徴のひとつ

としている。その意味で、非イスラーム圏である中国社会において、いかに宗教的、民族的マイノリティとして生き、そしてそうした回民あるいは回族という社会集団を生み出し続けていくかということに関わるものである。

但し一方で、これらの事例のあいだには相違もみられる。それはこれらの「運動」が、その時代ごとの歴史的な変化において直面する新たな政治的、社会的状況に即して、いかに自分たちを作り変えていくのかという問題に対する取り組みでもあることと関連する。前者は、明代において漢化政策が推し進められる状況下で、それまでの「外国人ムスリム」としてのあり方から、「中国のムスリム」にいかに変わっていくのか、あるいは変わらずにいるのかという回民の中国社会でのあり方の問題に取り組む試みでもあった。また、後者におけるイスラーム教育と世俗的教育の両立は、封建的国家体制から国民国家の形成へと向かう近代化の過程において、国民国家のなかに回民をいかに定位するのかという問題でもあった。

こうした回民ないしは回族の歴史にみられる「運動」と比較して、本論で取り上げた現代中国の都市部における回族のイスラーム運動を捉え直してみると、この運動の持つもうひとつの可能性がみえてくる。それは「回族」と「ムスリム」を異なるカテゴリーとする認識の変化に関連する。現在も現地において、婚姻など身体的な関係、あるいは個人を超えた社会的な関係の構築において、民族の違いは問題とされる。しかし、上述のように、一方で敬虔さに基づく「ムスリムであること」が重視されるなか、漢族は潜在的なムスリムとみなされうる状況が生まれている。また、それに伴い、イスラームに改宗すれば漢族との通婚が許容される、あるいはそれほど大きな問題とされない余地が拡大しつつある。歴史的に回民は他民族との通婚を通じて、その社会を拡充してきた。族内婚の選好に端的に示される回族という「民族集団」の境界は、清末の回民と漢人の対立の激化によって、その当時の数ある対立軸のなかのひとつに過ぎなかったものが実体化し、中国共産党の民族政策と回民の国民国家制度への位置づけを目指す中国イスラーム新文化運動との結びつきにより制度化されたものである。上記のように「回族」という民族的属性よりも「ムスリム」という宗教的属性が今後も前景化し、回族のイスラーム運動への漢族の参加や漢族との通婚が許容されるとすれば、回族の運動はこのように歴史的に構築された回族と漢族とのあいだの境界を、その民族の違いを超えて開かれたものへと変えていく萌芽と捉えることが可能かもしれない。